



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

## 「われら高年期探検隊 5 遺跡は残り、人は消える」

6月は、仕事は暇なのに忙しかった。来客、セミナー、シンポジウム、国際ヨガDAYの準備委員などなどである。忙しいことは大いに良きことだが、不幸もあった。

親分が急逝した。わが輩の学生時代の恩人である。親分は苦勞人である。出生に恵まれず養家で育った。京都の材木屋に職を得たが、情緒不安定に陥った。思うところがあつて奮起し中央大学理工学部に入學した。深夜に肉體労働をして學費を捻出した。その後鹿島建設の重役に上り詰めた人である。

わが輩のように親の脛をかじって、何とか卒業した軽々の学生ではなかつた。親分はわれら学生の面倒をよくみてくれた。きっと“家族”を創りたかつたのだろう。その家族の中心が消えた。悲しいことだ。

近年つぎつぎにわが輩の大事な人が消えていく。昨日も某名誉教授が來たつて“終活”を語つていた。理系の教授で神も仏も信じない。すがることなく、すべての物と記憶を棄て始めた。

(最後の別れを告げに來られたのか・・・)

それを聞いたぼん子が口を挟んできた。

「先生、“就活”するんですか？」

ばか者！と言いたい、ひよつとしたら彼岸に行くことは再就職なのかもしれない。

人は消える。せいぜい百年もてばよい。諸行無常だ。

ところが、ドーラヴィーラ遺跡はおおよそ4,000年ほど前のものである。まだ残っている。

さあさあ、城塞へ、と読者諸氏は思つたかもしれないが、腹が減つては戦ができない。午後1時になつていた。以前に來たときはお弁当持参であつたが、小さな食堂ができていた。

遺跡はカディール島の中にある。かつては海に面した島であつた。海上貿易で繁榮した都市であつたと思われる。アブダビ、バーレーンなどを航海し、メソポタミヤ文明と交易していた。彼の地では、インダスで生産された紅玉髓ビーズのネックレスが発掘されている。

インダスの都市プランでは、城塞部と市街地とが区分されているが、ドーラヴィーラにおいて両部は一つの市壁で囲まれている。

精巧な武器などはあまり発掘されていない。軍事は強力ではなかつた。サイコロ、ゲーム盤、こまなど

子供用の玩具が発掘されている。これらから推測して、絶対的権力者は存在しなく、身分制度もない社会であつたらしい。

(戦争反対！ 商売繁盛が一番だね)

これだけの都市を維持するのは、まず何が必要だと思ふ。読者諸氏よ。

その答えは「水」だ。海水は腐るほどある。しかし、それを飲むことはできない。そこで上水道の施設が必要となる。

城塞の外側に貯水壕が張り巡らされ、雨期に取水した川水が溜められた。壕の深さは約7mもある。貯水壕は、ただ掘っただけではない。岩盤を加工した跡が見られる。

(これは見ものだったよ)

インダス文明最大の石組み井戸(直径4.1メートル、深さ12メートル)がある。牛に引かせて桶で水を汲み上げた。牛が引く場所や、桶の綱の跡などが残っている。水は足場から土中の細い溝を通り、水溜めに流される仕組みになっている。土中を通過することによって冷たい飲料水となる。また地下から汲み上げられた水は神聖なものとして、王の水浴に使用されたと考えられる。

(やはり、水が一番大切だ)

このような大規模な都市が、なぜ廃墟となってしまったのか。読者諸氏よ、考えてみよう。

外敵が攻めてきた。疫病が流行った。気候に変動があった。商売が不景気になった。さまざまに考えられるが定説はない。

わが輩は水だと思っている。水がなくなると、どうなるか。文明は滅んでしまう。

古代文献によると、インダス河、ガンジス河、サラスワティー河が流れていたとされるが、現在サラスワティー河は存在しない。この遺跡はその下流に位置していたと思われる。

京都の総合地球環境学研究所のチームがインダス文明の調査結果を発表した。

「インダス文明の衰退の原因は、インダス川下流域での洪水や海水準変動による海上交通への打撃など、多岐にわたることが明らかになりました。その結果、インダス川流域から東への大きな人口移動が起こり、文明の地域ネットワークの微妙なバランスが崩壊した、というのが本プロジェクトの研究から得られた結論です」

(わが輩の説は当たっているようで、当たっていないのか?)

この調査によって中学の教科書が書き換えられた。それを紹介しておこう。

○遺跡の数・・・2002年に1052といわれた遺跡は2013年に2600ヶ所に増えた。

○海と関係・・・インダス文明時代の海面は約2m高かった。

○人の移動・・・ハラッパに埋葬されている男性の歯を分析すると、他所の男がハラッパの女性と結婚し、ハラッパで亡くなったことが分かった。

インダス文明の人たちは交易や季節などで移動したことがうかがえる。

つまり、文明は<消滅>したのではなく、<移動>したのである。

(これは、わが輩が十年前に主張した説であると、今さながら自慢する！)

遺跡は何とか残った。しかし、人は残らない、とすでに述べた。しかし<移動>することはできる。われらが移動する先は、まさに<彼岸>である。そこ以外にはない。